

「又」の味わい

松浦 敬親

前川敏夫氏が、前号のこの欄で、次の三句を挙げて論じている。

大空に又わき出でし小鳥かな
夏の闇鶴を抱へてゆくごとく
梅咲いて庭中に青鯨が来ている

前川氏は、には感動するが、と に対しては、「どこがいいのか解らない」という。前川氏によると、の夏の闇と鶴、の梅と青鯨との間には、「何の脈略も論理的つながりもない」のだそうだ。本当にそうなのだろうか？

は、比喩（「ごとく」があるから直喩）の句だ。夏の闇の猥雑さに対して、鶴が純粹華麗で、「掃溜めに鶴」の意外性がある。しかも、鶴を自意識の象徴と考えると、更に緊張感が増す。ちゃんと脈略はつくのである。

の場合も、早春の不安や恐れが、青鯨（全長四メートルを超す鯨で、人間をも襲う）に象徴されていると考えると、よくわかる。

例えば、作者（金子兜太氏）は秩父の産だから、秩父事件（明治十七年十月から十一月）を前提にすると、青鯨は官軍だ。作者が水戸（徳川御三家の一つ。梅の名所の偕楽園がある）の高校へ行ったことから考えても、それが言える。

勿論、作者の父親は医者で、上海同文書院（東亜同文書院。日本の中国進出のための中堅幹部の養成所）に勤務し、作者も二歳から四歳までそこで過ごした。これを踏まえると、中国原産の梅に対して、青鯨は日本軍だ。あるいは、反撃に出た中国軍だ。

更に言えば、作者は昭和十八年に東大を出て日本銀行に就職したのに、たった三日居て海軍に入り、翌年にはトラック島（日本の連合艦隊が居た要塞島）に赴任した。これを前提にすると、今度は米軍が青鯨になる。しかも、船が沈めば本物の青鯨に襲われるから、青鯨がトラウマ（精神的外傷）の象徴になったとしても不思議はない。

このように、梅と青鯨との間にも、ちゃんと脈絡がつく。内的必然性があるからである。

前川氏は、（作者は長谷川權氏）と に対して、「指導者といわれる人達が、昔のフランスの象徴派の詩人のようなことを、国民文学である俳句に持ち込むのは俳句の本質から外れているとおもふのだ」と書いている。これも、妙な話だ。正岡子規の提唱した写生は、洋画家（浅井忠や中村不折）との交

流から学んだ手法だからだ。俳句を新しくするために象徴派の手法を持ち込むのは、むしろ俳句の本質に合ったことなのである。

そもそも、俳諧では、和歌や連歌で使わない俳言（はいごん）を使った。その中には漢語も入るから、和魂漢才は俳諧の姿だ。俳句では、それが和魂洋才になったのである。

前川氏は、（作者は高浜虚子）に滑稽の萌芽を読み取るという。しかも、「この句に感動しない人は少ない」という。萌芽でこれだけ感動させるとなると、滑稽は未恐ろしい。その内に、に感動しない者や、との作者などは、非国民ということになる。俳句弾圧事件の再来だ。

勿論、これは冗談。は霞網の時代で、「又」の味わいのわかる人なら、そうはならない。